

# 現実と空想のあいだ

—— 国際ロビイスト田中清玄と転向経験 ——

後 藤 美 緒

## 1. はじめに

安田講堂に機動隊が突入した1969年1月18日、同日に開かれた新人会創立五十周年記念集会で田中清玄<sup>(1)</sup> (1906-1993) は自分の学生時代の役割を次のように述べている。

私は新人会で、ランク・アンド・ファイル(引用者注：指導者ではない一般組合員、大衆を指す)で、さっき田中正文さんがおっしゃったように、新人会の、何というか、今の言葉でいうと親衛隊長ですかね、という役割です。(石堂・堅山編 1976: 71)

清玄はここで、学生運動の指導者であった新人会において、自分の立場は指導者ではなかったと述べ、新人会との距離を表明している。

清玄は、戦闘的な共産党指導者から「右翼<sup>(2)</sup>」へと転向した人物として知られる。彼は1927年の東京帝大入学と同時に、社会科学の理論研究と実践活動を行なう新人会に入会し、同年9月に共産党に入党した。1930年には党の責任者となって崩壊した党の再建活動に従事し、同年9月に逮捕され、以後1941年まで十一年間服役した。服役中の1934年に転向声明書を上申して共産党との関係を絶ち、戦後は積極的に反共を表明した。終戦間際の1944年から事業をはじめ、実業家・国際ロビイストとして自民党議員<sup>(3)</sup>や財界人<sup>(4)</sup>と親しく付き合い、国内外の事業に関わった(表1)。刑期を終えた彼の活躍ぶりは次の例からもわかる。たとえば、復員軍人や出獄した人びとを見込んで1945年に土木請負業神中〔尽中〕組をつくり、のちに血盟団事件に関与して清玄と同時期に服役し知己を得た四元義隆へ譲渡した。日本的経営の礎石を築いたといわれる電産争議(1950



写真1 田中清玄 晩年の写真  
(出典 田中・大須賀 [1993]  
2008『田中清玄自伝』文芸春秋 表紙)

表1 戦後の事業展開

土木 (開発・干拓)	1944年～ 46年ごろ	鶴見で造船事業 福島県山吹ヶ原開拓 横浜・東京で復興事業 釜石にロックフィルダム造成 八郎湯・印旛沼の干拓 沖縄嘉手納基地建設	1946年ごろ	タイの復興支援(三井・池田成彬の要請で)
エネルギー (ガス・石油・核)			1960年	オイルビジネスのためのアラビア湾に渡航
			1961年	クウェート訪問
			1967年	モンペルン会議に参加 アラビア半島で居住
			1969年	アラブ諸国訪問(年13回)
			1970年	アブダビ王に会う
			1971年	インドネシア訪問
			1973年	世界エネルギー会議に参加
			1974年	アメリカでの石油会議に参加 ロンドン滞在
			1973年	訪欧で北海油田開発交渉に参加・失敗する
			1975年	ヨーロッパ、アラブ諸国訪問
			1977年	ヨーロッパ、アラブ諸国訪問
			1974年	ブラジル農相と会う
食料	1975年	食糧問題の論考発表		
環境	1991年	環境問題講演会のために来日したオットー大公を宮 沢首相に引き合わせる		
	1945年	厚木飛行場に立てこもる海軍の解散交渉	1955年	香港を拠点に反スカルノ運動の救援活動
	1946年	電算会議に関与	1961年	モンペルラル・ソサイエティに入会
	1955年	王子製紙争議に関与	1966年	インドネシアのクーデター裁判をジャカルタで傍聴
思想・外交	1960年	全学連に支給提供	1973年	田中角栄訪欧に土光経団連会長と参加
	1961年	市川房江・田岡一雄と「麻薬撲滅・国土浄化同盟」 結成	1974年	ポルトガル外相と会う
			1980年	初訪中・鄧小平に会う
			1981年	訪中
			1982年	訪中

年)やベースアップをめぐる労組と会社が対立した王子製紙争議へ関与した。その過程で電力関係の大物実業家松永安左衛門の知遇を得、その縁から太平洋石油、国際エネルギーコンサルタントを設立、またインドネシアや中東諸国との関係を深めていった。そうした人脈や、天皇への称賛を表明したことから右翼と称されるも、国家主義者である児玉誉士夫とは相容れなかった。

こうした経歴ゆえに、清玄は主に二つの観点から語られてきた。

ひとつは、清玄の行動に着目する研究である。この研究群は各時期の具体的な活動に焦点をあてることで、清玄を武装共産党の指導者や政商と位置づけた。論じられる時期と活動は限られ、逮捕にいたるまでの活動(福士 1931, 小栗 1989, 鈴木1931, 楠瀬 1932, 神庭・横山 1935)<sup>(5)</sup>と、それ以後の政治や経済の活動とにわけられる(堀 2006)<sup>(6)</sup>。

清玄を戦前、戦後の各時期の指導的な人物として描く研究がある一方で、もうひとつの観点である思想の科学研究会は清玄を転向論のなかに位置づける。戦中の指導者層の思想変遷に目を向けた転向論において研究会は「転向思想史上の人びと——略伝」のなかで、清玄に触れている。そこで清玄の家族関係や戦前の党活動、戦後の経済活動を紹介し、彼の思想遍歴について、政治と経済の国際化がすすむ戦後の現状観察にもとづいた「武装共産党の冒険的共産主義から修正資本主義への転向。仏教を媒介とする転向でもあった」(思想の科学研究会 [1962] 2013b: 296)とまとめる。

思想の科学研究会は、移行のパターンやその際の媒体について示唆するものの、清玄による大衆との関係構築という観点はこれまで着目されてこなかった。

清玄が活動を開始した1920年代は、都市化と産業化を軸に大衆社会状況が出現し、知識階層にとって大衆との距離が意識されだした時期にあたる(筒井 [2005] 2008)。それは教育や芸術といった文化領域での関係者だけではなく、労働者や都市の経済下層階級の生活全般や労働に働きかける人びとも当てはまった。以下で明らかにするように、清玄は大衆との関係を築きながらも、男性同士の紐帯という高等教育享受者が作り上げてきた関係性も活動資源としてきた<sup>(7)</sup>。であるならば、清玄はどこで活動を行ない、どのような社会的属性の人と出会い、彼／彼女らの生活を理解したのか。そして、そうした実践活動をつうじて共産党や学術理論をどのように評価したのか。前述した研究群では、実践活動と共産党や学術理論の齟齬からくる葛藤が、彼の活動に与えた影響は十分に議論されてこなかった。清玄を考察するにあたり活動を遂行するための工夫や挫折を検討しない限り、この問題は明らかにできない。

清玄の幅広い思想遍歴は、戦間期に高等教育を受けて戦後各界で活躍することになった人びとのなかでも特異な経験といえる。

とくに清玄の振る舞いは、新入会員らにとっても受け入れがたいものだったと予想される。戦間期に高等教育を享けた人びとは三十代の働き盛りを戦中でむかえ、生きるために多かれ少なかれ戦時下体制で要職に就くことを余儀なくされた。そのなかで戦間期における共産主義との決別は「転向<sup>(8)</sup>」と呼ばれて、知識階層を中心に関心が寄せられた。だからこそ権力と信念とのあいだで抱えた葛藤に正面から向き合った中野重治の執筆活動は同世代や後続世代の人びとに影響をあたえた。逆に反共の公言してはばからない彼は、そうした反省からのがれて特権的な立場に身を置いたと捉えられる。

そうしたなかで清玄は新入会員らと距離を持ちつつも交流を保ちつづけた。冒頭でも触れた新入会創立五十周年記念集会の発言はその例である。そこには従来の思想枠組みでは捉えきれない発想が示唆されているのではないだろうか。ここで清玄を取り上げる理由は、清玄が良く国内外の諸分野の第一人者と接した人物であり、その営み自体が近現代日本を照らしだすものになっているからである。本稿では清玄が多様な立場から批判を受けながらも、生涯にわたって政治や経済といったさまざまな領域に関わっていたことに着目する。本稿では彼の活動をイデオロギーの問題には還元せず、活動の論理を明らかにすることを試みる。

清玄の活動を検討するにあたっては、清玄自身による事後的な記録を中心に新聞記事など幅広く収集した文献を活用する。非合法時代の共産党に属した清玄は、逮捕をのがれるためにいっさいの写真、日記、メモの類を残さなかった。戦後の活動についても同時代に公言することは少なく、60年代以降によりやく週刊誌や総合雑誌での対談やインタビューに応じて活動が広く知られるようになった。書かない、公言しないからこそ、回想録や新聞記事等の生業に関する記述のなかに彼の活動論理が浮かびあがってくる。本稿では上記の研究状況を踏まえつつ、彼の活動した時期の党や学術理論と実践活動とに生じた齟齬に焦点をあてて彼の活

動論理を明らかにする。

後年の清玄の活動は新人会が目標とした「民衆」に直接向かうものではなく、また反共と天皇への敬意を表すため一見すると右翼的側面であったかもしれない。こうした点において田中清玄は、筆者がこれまで検討してきた新人会員とはことなる位相に位置づけられる。

## 2. 三つの経験——会津の士族・函館のヨーロッパ・弘前の社会主義

### 2-1. 生活はヨーロッパ風、精神は会津風

田中清玄という人間を考えるにあたり、生まれ育った地域の特性と家族関係に由来する、一見すると矛盾するような要素を忘れてはならない。清玄自身、函館の少年時代を「生活はヨーロッパ風、だけど精神は会津の精神」（田中・大須賀 [1993] 2008: 25）と振り返る。

田中清玄は1906年9月5日に函館市近郊の七飯村に父幸助、母愛子の長男として生まれた。五歳のときに父が亡くなり、清玄は一人っ子として母や祖父母に厳しく育てられる。幼くして父を亡くした清玄ではあるが、祖父の玄直の遺産である牧場三万五千坪を引き継ぎ生活には苦労しなかった。

母の愛子は幸助の死後、再婚せずに助産師をしながら清玄を育てた。会津の家老職を勤めた家系<sup>9)</sup>であることを教育の指針とした母親は、自他共に厳しく、幼い清玄に嘘をつくことを許さず、剣の訓練と論語の素読、教会に通うことを義務付けた。この言いつけを守らなかった清玄は祖父の玄直の墓に連れだされて腹を切れと迫られたという（田中 1976a: 143）。そうした厳しい面をもちつつ、助産師としての愛子は女性と乳児たちの健康と自立を第一に考える人物であった。たとえば、乳児の健やかな生育を願って自己負担で牛乳を購入して新生児がいる家庭に配布したり、遊郭での出産に駆けつけたりした。また、産婦からの謝礼も、弟子が担当した際には弟子に渡したという（佐野 [1977] 1995）。

1918年に清玄は函館中学に進学する。ここで清玄は港湾都市である函館が作り出す文化を目や耳、舌といった五感を通して味わうことになる。中学時代を過ごした函館は横浜や神戸らとともに明治維新前から開港し、日露戦争後はその勝利に沸く大規模な漁業地として栄えた。北洋漁業の中心地である函館港には水産物取引のためアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国の外国船が集い、そこから西洋文化が導入された。函館には各国の貿易船を相手に商売をする商社や各宗派によって建てられた教会が街並みを作り、各国の料理人が店を構えていた。しばしば清玄はレストランでカレーライスを食べたという（田中・大須賀 [1993] 2008: 22-23）。また、函館中学の教壇には詩人の三木露風が立ち、高い文化的土壌があった。清玄は三木の勧めでトルストイ、ツルゲーネフ、ドフトエフスキーなどロシア文学を読んだという。レストランをはじめ、友人宅ではまだ珍しかったレコードが流れていた。こうした友人たちの保護者は外国相手の商社勤務が多

く、清玄の叔父もまた郵船会社の支店長であり、これがきっかけに外国への関心を高めていったと考えられる。

清玄は帝都東京から離れた地にいながらも近代文明の恩恵を得ていた、いわば周縁の近代人であったといえる。しかし、函館という地ばかりに目を向けて清玄の性格を類推すると人柄を見誤ることになる。明治政府が成立してすでに四十年近くを経ている時期に、清玄は主君を重んじて自己を律する士族的な精神も持っていた。いわば、近代と近世が矛盾することなく融合する土壌が作られていた。それは前述したような活気と緊張感が同居する空間のなかで培われていたのである。

## 2-2. 「すねかじり」による社会主義の実践

函館中学入学からはじまった高等教育機関への進学は、清玄を戦間期の男子学生固有の文化に触れさせるとともに、貧困や労働環境といったこれまで清玄が感得しなかった社会構造や構造が内包する問題に気づかせることになる。

ひとつは読書やスポーツといった学生文化との接触である。清玄は1918年函館中学、1924年弘前高校に入学する。前述したように、函館中学では三木露風が教壇に立ち、ロシア文学に触れる機会を得た。三木露風の薫陶を受けた者には、後に直木賞作家となった今日出海、新人会でも共に過ごした戦後の人気評論家の亀井勝一郎といった同窓生がいる。

また弘前高校在籍中、清玄は草野球や陸上、スキーに熱中した。高校二年の冬には長期入院をすることになるが、これはスキーによる骨折が原因である。旧制高校ではしばしば野球やボート、柔道の高校対抗別試合がおこなわれたが、それは彼らが時間と体力に余裕をもっていたからである。清玄は高校進学を希望していたものの、当時の男子学生があこがれていた東京の一高ではなく漠然と仙台の二高を目指していた。結局、母の勧めに従い、自宅から近い弘前高校へ進学することになる（田中・大須賀 [1993] 2008: 27）。母から離れることで、清玄は心身ともに学生文化を享受し、構成する一員となる。

さらに、進学は文化的高揚感を得るだけではなく、社会への関心を開くものでもあった。とくに、進学やその際の学校選択が本人の意志や能力とは無関係に保護者の生業や経済力と大きく関わっていることに清玄は気づいた。たとえば、中学進学にあたって同級生たちのうち、官吏の師弟は中学校を、それ以外の者は家業を継ぐために商業学校や工業学校を選択した。双方の鬱憤は市内の対抗試合で顔を合わせる際に、中学校のほうは「おい、丁稚」と呼びかけ、商業学校の方が「すねかじり」と応酬する形になって現れたという（田中・大須賀 [1993] 2008: 23）。

興味深いのは、旧制高校への進学が社会主義の文献に目を向かわせたと回想することである。そこではじめて清玄は自分の立場を説明する言葉を手に入れる。

高校に入学した時、大いに矛盾を感じました。同じ中学の秀才が貧乏なるがゆえに上の学校へ行けないのを見ながら、自分だけ進学しても、少しも面白くないんです。そこから心から満足するものをつかみたいと、色々煩悶した結果、河上肇博士の『第二貧乏物語』を読み、『社会問題研究』を呼んで、自分ひとりでだんだんマルクス主義に入っていったわけです。(南・田中・宇都宮他編 1959: 143)。

清玄が高校に入学した1924年、東京では社会構造が抱える問題に関心を持った学生らの、社会主義やマルクス主義の研究と実践をもとに問題解決を目指す団体の活動が各大学で盛んになっていた。なかでも新人会は1923年に発生した関東大震災の救援活動でいち早く組織立って働き、これを契機に学生の全国組織を作ったため高校生の間でも知られるようになった。また、会員たちは帰省の折に出身高校を訪れて活動を宣伝した。けれども、弘前高校は1918年の高等諸学校創設及拡張計画にそって創設されたため卒業生が少なく、関係者がいなかった。むしろ、弘前高校は「右翼の学校」と呼ばれ、学校には社会主義を研究する学生は少なく、図書館には社会主義の文献も限られた数しかなかった。

学生たちの新しい動きがはじまるなかで従来通りの学生文化を満喫していた清玄ではあるが、スキーでの怪我と盲腸炎の併発による長期入院が転機になる。清玄はこのとき病床でドイツ語の共産党宣言にふれ、「社会主義の方面的書籍」(田中・大須賀 [1993] 2008: 30) を手に取るようになった。退院後は京都から文献を取り寄せて独学で勉強をはじめた。

このとき関心を持ったのがアジアの一部としての日本の発展という発想と大土地所有制度である。清玄の母は助産師として働いていたが、実家は地主であった。「生活上の不満は何もなかった」(田中 [1993] 2008: 30) もの、だからこそ文献に触れることによって矛盾を感じたという。そして、「もちろん共産主義の理論学習だけでは満足できずに、間もなく実践活動へと進みました」(田中 1993: 192)。

この時の活動はその後の清玄を形作るものであったと考えられる。まず、快癒した清玄はまだ規模が小さかった学内の社会科学研究会に参加する。さらに実践活動に身を投じていく。具体的には1925年小樽商科大学でおこった軍事教練事件の反対運動<sup>(10)</sup>、翌年にかけて函館合同労組の組織化、1926年青森県車力村での車力農民組合の組織化である。青森県合同労組の指導者であった大沢は、戦中の清玄の態度を批判しつつも高校在籍時の清玄の働きが機動性、熱意とも秀でたものであったと次のように回顧する。

政治研究会から農民労働党労働農民党(ママ)とたたかっていたところ、田中清玄たちが、弘前社研の指導的な仕事をしながら黄金時代をつくった。彼らは労組事務所である私宅の二階に来て、泊り込みながらビラまきを手伝

っていた。いってみれば青森県労組は彼らの実際運動の実験室でもあった。  
(大沢 1962: 51)

青森県合同労組は職場や定職の有無を問わず、社会的ないし階級的な矛盾を覚えた者が加入する組織である。問題がおれば工場や農村を問わずにかけつけて労働者の先頭に立って経営者側との交渉や労働争議の指導、また小作農民の啓蒙や小作争議の指導をおこなった。活動はまだ全県に及んではないものの、労働運動の先進地である秋田県との交流も深かった(青森県民生労働部労政課 1971: 165-166)。泊まりこみでビラ撒きをした清玄にとって、この活動に参加することは労働運動の戦術を実地で学び、権利をもとめる労働者や農民の実相に触れることを意味していたといえる。

もちろん、この時期を振り返ってのちに清玄はロシア革命の英雄の伝記に「己を捨てて、民衆のために、国のために働いた姿に激しく胸を打たれ」(田中 1950: 189)で活動をはじめたが、「高等学校一、二年時代の思考傾向は、ヒューマニズムに出發した社会民主主義程度のものであった」(田中 1950: 188)と、運動に参加する意識の甘さに言及している。たしかに、自己と他者とにある経済格差に気づきながらも、運動に参加する際の自らの立場性、すなわち書籍を自費購入ができる経済的余裕や活動時間の捻出といったことには無頓着であった。

戦前の教育制度における時間的余裕、青年期の無尽蔵な体力、気力が学生たちを運動に参加することを可能にしていた。ただし、そのなかで清玄の経験は突出していたことは注目に値する。清玄の社会主義への目覚めは新人会員と同型を示す。彼らはしばしば同級生や自身を取り巻く環境から、矛盾を感じ、それを改善するために活動に参加するようになったと語る。彼らの多くは高校時代から活動に関心を覚えた者でも、まずテキストによる理論の取得に努め、争議に参加することはなかった。いわば机上での類推に終りがちな学生たちのなかで清玄は労働者や農民と接触し、学生以外のネットワークに溶け込んでいった。「すねかじり」といわれた社会的属性にしながら活動家という学生文化を抜け出した経験を持っていたのが清玄であり、それにいたるまでに士族的な精神、西欧を感じさせる先進的な文化、実践活動をとまなう社会主義という三つの要素を感受していた。この経験は服役後の清玄の活動に断片的に示されていくことになる。

### 3. 「一に度胸、二に腕っ節、三、四がなくて五にイデオロギー」——現場主義の確立

前節では清玄が、自身がおかれた環境から三つの経験を踏んできたことを確認した。進学を契機とした社会主義への傾倒は実践活動に結実し、清玄をほかの学生と差異化することになる。では、実践活動への傾倒は高校卒業後の清玄にいかなる着想を結ばせ、具体的に実践活動として発揮されたのか。以下で確認してい

く。

1927年4月に清玄は東京帝大文学部美学科に入学する<sup>(11)</sup>。当初、私淑していた河上肇のいる京都帝大への進学を希望していたが、母の学資が得られずに進路が決まった。そして、入学と同時に新人会の合宿に参加する<sup>(12)</sup>。その後約一年間、清玄は合宿で会員らと起居を共にする。

清玄が入会したころの新人会は、関東大震災での救援活動の成功から活動も人員も最も充実していた。石堂清倫が責任者となった合宿は上野桜木町、谷中清水町に、最大規模で営まれていた（後藤 2014: 57-81）。会では大間知幹事長のもと、新人会が関わる講演会が月に一、二回、学内外で開催された<sup>(13)</sup>。さらに読書を中心にした研究コースも策定され、居住地を中心に構成されたグループをもとに、月数回の頻度で行なわれた。そこでは理論家として知られた福本和夫に影響を受けつつ「有産者社会の構成と変革の過程」、「政治理論」、「帝国主義の諸特質」をテーマにマルクスやエンゲルス、レーニン、ルカーチらの文献が輪読された。会合には10名程度が集まって議論を交わすが、とりわけ新人会向けの読書リストは全国の学生向けのそれより内容も高度で、会員たちはそれぞれの活動とともに読書会に参加して、研鑽に努めた。

しかし、清玄は読書会の恒常的な参加者とならず、それとはことなるところにみずからの活動の場を見出していった<sup>(14)</sup>。たとえば、7月には新人会とは無関係に、労働運動の活動家として知られた山本懸蔵とともに地元北海道小樽の港湾労働者争議に参加した。ここで清玄は、労働階層出身の山本の演説が聴衆の心をつかむ場に立ちあっている<sup>(15)</sup>。さらにその後、非法法共産党の幹部たちに会い、非法法下における活動家としての振る舞いを教示された。非法法共産党のリーダー佐野学からは、おなじく新人会の先輩であり理論家として知られた水野成夫と浅野晃の存在を教えられるが、彼らと距離をとるようにも助言されている（田中 1976a: 154）。また共産党員の杉浦啓一から、党員としての心得として、第一に学生運動を中止し、第二に演説・執筆など派手な行動をやめ、第三に学生運動の参加者に共産主義のことを伝えてはならないことを指示される。さらに7月に出たばかりの、いわゆる27年テーゼを渡された（田中 1976b: 87）。これは運動の担い手をプロレタリアートや農民に定めて知的階層のリーダーシップを否定するもので、暗に当時の理論的指導者であった福本を批判するものである。助言を受け入れて清玄は9月に党名を「奥山久太」<sup>(16)</sup>と名乗り、入党する。こうして新人会会員ではなく共産党員としての活動を始めることになる。

入党後の清玄の大まかな足取りは次の通りである。1927年京浜地区に配属され芝浦の沖電気労組書記に着任、芝浦製作所鶴見工場争議へ参加。1928年横浜ドッグ、東洋バルブ、東芝への宣伝・勧誘活動。1929年、東京第三地区委員として月島・本所・深川・神田・新橋地域の宣伝・勧誘活動、これを辞し再び京浜地区における宣伝・勧誘活動に関わった。

1800年代末から始まった臨海開発は、1920年代にはすでに東京から横浜にまた



がる一大工業地帯をうみだした。重工業の工場が林立したこの地域では工場労働者、および原材料物資の荷揚げ作業を行なう港湾労働者ら肉体労働の従事者が新たに必要となった。先に確認した清玄の足取りは、こうした時代の要請によって生まれた地域と産業と呼応している。

さらに、重要なのは港湾労働の臨時雇いになり肉体労働に従事することから党員としての仕事をはじめることである。そしてそこでは、労働者たちとの付き合い方やその発想を詳しく知り、また信頼を得るという、これまでとはことなる経験をする。

労働者は口先では動かなかった。京浜ドッグでは臨時雇いになりドウエ(カンカン虫)から始めた。三日もやると腹や腿が痛くなり、しゃがむこともできない。『おめえセイガク(学生)か、スケ(女)でしくじったな』などとからかわれた。彼らと青空トバクもやったし、出入り(喧嘩)の手伝いもした。なにしろ空手ができるから、たちまち「セイガク」から「兄貴」に祀り上げられる始末だった。こうして彼らの信頼を得たところで、パッと無産者新聞を撒く。すると、「なんだ、おめえ、やっぱり共産屋か」と来る。しかし、警戒心は示さない。自惚れでいうのではないが、やはり‘人間’を売り込んでから出ないと、大衆は動くものではない、『無産者新聞』を手にした彼らは、ほとんど天皇制の問題にひっかかる。「共産もいいけどよ、天皇さんをクビにするのはどうかなあ」これが素朴な声だった。(田中 1976b: 98)

私自身は京浜地区に入って、土工や工場労働者との付き合いが多かった。彼らの価値基準は『一に度胸、二に腕っ節、三、四がなくて五にイデオロギー』なのである。まず『人柄』なのだ。」(田中 1976b: 96)

港湾労働は肩荷役が中心であり、不安定な足場で重量のある荷物を運搬するため技術を必要とする熟練労働の側面を持つ。機械化が進んでいない1900年代初頭、港湾労働は肉体労働を軸にした協業体制をとっていた。また、発着が天候に左右されるため仕事は安定せず、前近代的な労務統括組織のもと極端な長時間労働も発生した。なによりも、港湾労働は日々の標準作業量が過大な労働のひとつであった(北海道立総合経済研究所 1964: 162-163)。つまり、港湾労働は仕事場も労働内容も過酷なものであり、スポーツで鍛えただけの学生が簡単に対応できるものではない、過酷な労働現場であった。「セイガク」という呼称はまさに、労働者と学生がことになった社会的属性に在ることを労働者の側から突きつけるものである。

党活動のために清玄はまず、もっとも過酷な現場にはいることから始めた。その際、港湾労働現場の新人であることや社会的属性のことなる学生であることへのからかいにも応じた。さらには彼らの楽しみである「トバク」や利益や面子を

賭けた「出入り」にも参加した。つまり、清玄は大上段から理論を振りかざすのではなく、そこに働く人びとの論理にそって自らの行動を適応させた。

こうした経験は、従来の党の活動に工夫をもたらすことになる。たとえば、『無産者新聞』の配布も、最初は脱衣所に持ち込んで反応を確かめ、関心があった場合には『赤旗』の配布へと移行した。その際には職場ごとに冊子を作り、職場の矛盾点を書き添える趣向を凝らした（田中 1976d: 220）。そこには、黨員としての責務を果しつつ、労働者や職場を一様に捉えるのではなく、労働者の専門家としての矜持や労働以外の関心に向き合った清玄のあり方が浮かび上がる。「人間を売り込む」、「人柄」という言葉は、労働者を一枚岩的に捉えようとする共産党の支配的発想にたいする違和を表出していると考えられる。

こうした労働者や農民に向き合ってきた経験に裏打ちされたものが、後年の党幹部への批判につながる。清玄は理論に耽溺して実情を知らず、それゆえに現場で役立たない人びとに厳しい視線をむける。共産党で活動し始めた幹部たちについて次のように述べている。

「工場の活動も知らない街頭分子ばかり集めて、あぶなかしくて仕方がない」（田中・大井 1776: 182）

宮本（注：引用者——顕治）は蔵原（注：引用者——惟人）の紹介で昭和7年ごろ入党した。地下組織の革命運動はおろか、労働運動も大衆運動も何一つ経験のない文化人なのです。（田中 1976c: 45）

清玄はのちにこの時期を振り返って、「大学の構内で議論ばかりしているよりは、本物の革命の道を歩く実感があるだろう」（田中 1976b: 87）と述べている。こうした発想に至ったのは高校時代からすでに実践活動に参加してきたからこそだと考えられる。高校時代に参加した青森合同労組は立ち上がったばかりのため、参加者の職種もニーズも多様なため柔軟な対応を求められる、いわば現実が理論上の仮説を裏切る「実験室」のような場であったからだ。高校時代の実践経験こそが、学生の感覚とも、党の理論とも、また労働者の意識ともことなる、目の前の個々人への敬意や交流をもとにした活動論理を作ったのである。この人間理解は、以降の清玄の活動で繰り返し表れるものである。

#### 4. 生と死をめぐる問い——清玄の「転向」経験

労働者たちと肩を並べることによって現場の論理を探り、自分を律するという清玄の行動は、共産黨員としての任務から開始した。だが、人間性を媒介にする清玄の発想は、活動の取締りが厳しくなる1930年代において、副次的な反省を生じさせることになる。本章では清玄の親密な他者への考察から、その過程を明ら

かにする。

#### 4-1. 二つの死

清玄は黨員としてのキャリアを着実に積みあげていった。具体的には検挙があいつぐ1929年4月に第三地区の委員長となり、担当した京浜、第三地区から検挙者をひとりも出さない組織運営をおこなった。そして、まだ検挙されていなかった佐野博とともに共産党再建活動に従事し、1930年には党の責任者に着任する。このとき清玄に関わった活動は第一に組織の再構成<sup>(17)</sup>、第二に各地の争議への関与<sup>(18)</sup>、第三に上海への密航によるコミンテルンとの連絡である。この間、取り締まる警官らに、ときに銃をもって対峙した。

しかし、清玄は1934年7月に転向声明書を提出して、共産党との決別を表明する。以後、冒頭でも触れたように実業家として国内外の土木、エネルギー、食糧、環境事業に関わるとともに、とくに50年代後半からは国内外でのイデオロギー問題への発言やコンサルタント事業に関わっていく。

共産党の指導者から「転向」宣言、そして反共へという変遷は、表面的にみれば無節操にもみえる。しかし、清玄には一貫した発想が存在していた。それを検証するために、占領下の1949年に『文芸春秋』誌上に著された「暴力と死について」をみてみたい。これは管見のかぎり、清玄がもっとも早く自身の主張の変節をまとめたのべた論考である。かつここで触れられた死というモチーフはその後何度も触れられるもので、清玄の思想的原点がうかがえる論考である。

この論考の中で清玄は、自身の転換を「暴力」と「死」の二つに収斂させて語っている。まず「暴力」は、清玄自身が党活動を遂行するためにおこした五十件以上におよぶ主に警察官、特高刑事に対する殺傷事件、そしてその結果として警視庁および内務省特高課の担当者らから受けた峻烈な取り調べである。しかし清玄の発想の特徴は、「死」およびその裏表にある生への問いかけにこそある。

ここで清玄が述べる「死」とは、単に生命活動の停止を意味するのではなく、自分の意志で自由にならないもので、併せて没我の境地のもと信念を実行し、そのためにはときには他者のために生命をささげることを目指す。

論考では二人の人物をもとに死が語られる。まず、労働者出身の運動家渡辺政之輔である。争議の指導のために訊ねてきた清玄に、渡辺が「この仕事で死ぬるか」(田中 1949: 70)と問いかけ、「こんな小さな事で死にたくありません」(田中 1949: 70)と答えた清玄にたいして「小さい事に死ねない奴は大きい事では尚死ねないよ」(田中 1949: 70)と諷めたというエピソードが示される。このエピソードに続けて清玄は自身の逮捕後、十日余りの肉体的にも厳しい取り締まりを受けたこと、取締りという侮辱の無念さに対して死ぬことによって復讐しよう何度も自殺未遂を試みたことを語る。だが死にきれず、かえって闘いぬこうと決心したという。

渡辺は労働者出身の運動指導者として共同印刷争議、日本楽器争議などの大き

な争議を指導してきた。そして、活動のさなかの1928年に官憲と撃ち合うなかで自殺する。これは渡辺が保持していた共産党の情報を守るためだったといわれている。ひるがえってこの時期の共産党の状況を概観すると、1925年の治安維持法以後、取締りが強化されて党内部では当局への情報提供や裏切り、殺人が発生し、黨員同士の信頼関係が崩れる事態が続いた。さらに追い打ちをかけるように、1933年には指導者であった鍋山定親と佐野学が獄中で転向声明を提出し、黨員の離脱が続く<sup>(19)</sup>。1920年代後半以降、信念のために生命をかける共産党の指導者は減少していた。そのなかで渡辺は職務内容にかかわらず、身をもって信念に沿った活動を遂行することを示した。渡辺と自身の生死を捉えて、「生も死も決して自分の意志の自由になるものでもなく、大いなる力に結ばれていることに気付きました」(田中 1949: 71)と述べる。清玄は自分が生き残った意味について、死とは信念の延長線上にあり、自分の意志とは無関係に決定するものと解釈した。

渡辺の死以上に重要だったのが、母の死である。母の愛子は清玄が逮捕された1930年に遺書を残して自殺する<sup>(20)</sup>。清玄はこれを母の死後一年を経た1931年に獄中で知る。人前では平静を保てたものの自房では泣けて仕方がなかったが、それでも当初は「母が母の信念を自己に捧げた如くに、私は自己を共産主義に捧げようとして決心を益々堅めた(ママ)もので」(田中 1949: 72)あったという。

だが次第に母の死が別様なもの、すなわち清玄への諫死として認識されるようになる。

母はつまり自分自身を裏切った者の幸福のために、不肖なる子である私を目覚めさせるために自分の信条にもとづいて自らの生命を絶ったものであります。果たして然らば私自身は、母の如くに自分を裏切った者やまた、自分の敵の幸福のために自己の信条に基づいて喜んで死んで行けるであろうか、どうか？(田中 1949 : 72)

ここでも死が生前の何を意味しているか問うことになった。そればかりか、過去の活動を顧みる契機になった。その結果、これまでの活動は「プロレタリア大衆のため」や「革命のため」といった「美しい名目」のもと、「名利」や「名誉心」を求めたものであると反省するにいたった。

之后で気がついた事ですが、当時の私の死の解決とは、プロレタリア大衆のために死ぬるとか、革命のために死ぬるとかいふ、非常に美しい名目を必要として、云わば自己の一心の名利のための死の決心であったわけです。それは恰も、死後護国の英霊として靖国神社に祭られることを期待した特攻隊員の決心のような安価なヒロイズムにすぎないものでした。／この時分私は、『真の大義のために逆賊の汚名を甘受して従容死につく』体の生死逸脱とか、生死一如という境地は思いもよらぬものでした。自己を深く掘り下げ

て、其所に見出したものは、無意識の中に名誉心に囚われた、見るも無残な自己の醜い姿でした。(田中 1949: 72)

当時のマルクス主義解釈の範疇において、死は、革命のために捧げられたもののみが肯定され、それ以外の死は意味をもたなかった。信念の為に自らの命をかけるという点では革命のための死と母の死は共通しているものの、「自分を裏切った者」である息子のために「自己の心情に基づいて」亡くなった母の死はイデオロギーのための死ではない。しかし、たとえ無意味化されずとも清玄にとって母の死は大きな衝撃であった。母の死は、それまで築いた親密な関係やそこから生まれる感情が、時には人びとに苦難を生じさせながらも、生活を形づくっているものであり、党の理論とは相容れないことを悟らせたのである。

#### 4-2. 死生観からみる戦後の事業展開

自身の転換点を説明する際に言及する二つの死への語り方に共通するのは、渡辺と母愛子への敬意と愛情である。両者はともに十分に豊かではない人びとが置かれた状況を改善したいという信念のもと、評価や利益を度外視して活動続けた。理論をあてはめるのではなくまず現場に立って、状況を分析し、現実にある資源をもとにする。そうした論理にもとづく営為は、党の活動目標規則と形態は似ていても、その人生を振り返ったときに異なる次元にあることを学ぶことになった。そのことに気づいたことが清玄の転換となったといえるだろう。

死あるいは生をめぐる葛藤は、出獄後の清玄の生き方に影響をあたえたと考えられる。

そのひとつは1973年の清玄狙撃事件への対応である。11月9日、丸の内にある東京会館で戦前からの共産党員で国際共産主義運動の指導者だった高谷覚蔵の出版記念パーティに参加した帰り際に、清玄は狙撃される。撃たれてなお犯人を捕まえようとした清玄は合計三発の銃弾を受け、十時間余りの手術を経て生還する。その後、犯人の処遇について、検事宛に寛大な処遇にしてほしいと上申書を提出した。実際、判決まで一年余りという速さで審議は終り、服役も短いものになった。このとき、山口組会長であった田岡一雄から報復を促されるものの、それは二・二六事件のようになり日本が破滅するからと断ったという(田中・大須賀 [1993] 2008: 168-169)。

生命の危機にさらされたにもかかわらず、清玄は、犯人は親一人子一人で自分と同じような境遇にあり、命令されてやったにすぎないと述べて狙撃者への敵意を表さなかった。対して、この事件の裏幕と称された児玉誉士夫との面会は断わり続けた。なぜなら児玉の戦前からの活動は「世のため人のためにやるなら別だが、国家の名前を使いやがって、一番悪質恐喝、強盗の類い」(田中・大須賀 [1993] 2008: 168-169)であるからという。児玉が戦中に中国大陆で利権を得て政財界のフィクサーになり、その後アメリカ反共政策に奉仕する便利屋になっ

ていたことは、1976年のロッキード事件で明るみに出た。児玉を私益の追求者と批判する清玄にとって、狙撃者を批判することは児玉の立場を隠すことになる。狙撃者への対応とは、清玄の活動の源泉が名利や名誉心ではないことを示すものであった。

また、終戦直後からかかわった事業にも生死をめぐる清玄の考え方が現れている。第一章の表1で確認したように、土木、食料、エネルギー、環境の問題解決に清玄は事業として取り組んだ。それはあたかも戦後日本の政策に同調、ときには先取りするような動きをしていたともいえる。

終戦直後、焦土になった国土での生活を余儀なくされた復員兵や焼け出された者が必要としたのはなによりも食料や住居であり、そして仕事であった。この時期、清玄は終戦前から干拓による農地開発に着手して食料生産に関与するとともに、被害の大きかった東京・横浜での復興事業に乗り出す。沖縄の基地建設への関与は、戦後の復興事業で必要となる資金の調達と土木技術の獲得のためにおこなわれ、付随して雇用を生み出した。さらに60年代に入ると、石炭に代わってあらたなエネルギー源になった石油獲得のためアラブ、東南アジア諸国と独自に交渉して輸入ルートを確保している。

食料、土木、エネルギーのいずれもが各々の時期においてもっとも生死に関わり、かつ生活の充実につながるものであった。もちろん、事業はそれゆえに大きな利益を生んだが、危険と隣り合わせた側面を持つ。事業運営のために、時にはまだ国交が開かれていない現地まで足を運ぶには、並々ならない覚悟と不安を上回る期待があったと推察できる。

こうしたことは、マルクス主義や共産主義の労働者や社会構造理解への批判となって、戦後、早くから現れている。実業家として横浜や沖縄で土木事業を展開していた1950年代初頭、清玄は講演で次のように述べるが、そこには今日の労働が旧来の理論では捉えきれないことを冷静に観察する姿が示される。

マルクス主義及び共産主義の根本的誤謬は労働価値説です。彼らが価値を創る唯一の源泉は労働力だという。ところが現実には、いまはオートマテイクの工場がいくつも出来ている。電気なんかもそうです。昼技術者が一人、夜技術者が一人で何キロワットも生産している。この現実の姿を見たら、労働者だけではものは絶対に生産できない。たとえばダムなんか、土質学者、数学者、土木学者、それから物理学者、そういうものの頭脳の働きの総和がダムです。これによって計算し、測量し、設計されたものに基づいて施行者が仕事をやる。こういった使用者というものができて、それに基づいて労働して（ママ）ダムが出来て行く。労働者の努力だけでは何事も出来ない。そこで生産を指導しているものは経営者、生産責任者、いいかえれば頭能力だ。／だから経営者および技術者の頭脳力に結びついた労働力のみがはじめで価値を創造する一つのファクターであり得る。労働価値説は今日では根本

## 5. 終わりに

これまで田中清玄の営みをみてきた。そこからは青年期の肉体労働を通して知った労働者の世界観への理解こそが机上の理論を廃し、活動を形作っていったことが浮かび上がる。そうした発想を持つとき、党はもちろん、労組や政党といった目的が限定される組織ではその活動が制限されることが予見された。また、国家の利益を追求する官僚や、権力を追及する政治家にも当てはまらないものがあった。

現状から活動の論理を立ち上げるからこそ、さまざまな立場への批判につながっていく。しかし、さまざまな立場から批判を受けたり、あるいは無視されたりと、清玄の活動理念は表立って共有されることは少なかった。こうしたことは、清玄の問題ではなく、これまでの日本における思想史や政治研究、知識人論がイデオロギーでは割り切れないものを救い上げる土壌がなかったと推察できる。清玄をめぐる右翼、左翼という枠組みでの捉え難さはこうした土壌に由来する。

なお、新人会参加者としての清玄を捉えるとき、清玄の特異性は思想の幅ではなく、新人会入会以前の経験を手放さなかったことであるといえる。新人会は思想的にも活動的にも多様な志向性を持ち、内部に対立を含んでいた。思想的には、草創期の議会制社会主義からアナキズムまで、1925年から27年頃までの福本主義の受け入れを中心に、リベラリズムから共産主義まで内包した時期がある。また、活動内容にも理論的研究と実践活動のどちらを優先させるかつねに議論的になっていた。こうした多様な層を抱え込んでいたのが新人会であるが、それは当時、社会問題を多角的に検討する活気ある組織がほかになかったからである。それゆえに多様な志向を持つ人びとが集積することになった。新人会は自らを国家の保障からこぼれ落ちる人びとと共にある、現状の改善者と空想した（後藤 2014）。多くの参加者は学生期に活動として結実したが、清玄においてはそれ以前にあり、それが冒頭の新人会との距離につながることになったのだろう。

戦後、70年を迎えた今日、戦前、戦後の連続と断絶は改めて問われている。とりわけ、戦前の高等教育享受者たちと体制との関係は重要な課題であるが、それをイデオロギーの発露として分析すると見落としてしまうものがある。各人が活動を遂行するなかで直面した課題やそこから編み出された技法、人間理解を含めて内在的、具体的に明らかにすることが必要になるだろう。

本稿では清玄の活動論理を明らかにするために生業をとりあげたが、彼の国内外の政治・思想・経済的なネットワーク、指導者性やその問題点については限定的な記述にとどまっている。戦後、清玄の海外へと向かう関心の萌芽を彼の経験に即して示唆したものの、政治や経済の国際化した戦後社会での役割はより詳細な検討が必要である。このことは、清玄のみならず、戦後日本社会や知識人を捉

える際に重要な観点であり、今後の課題としたい。

注

- (1) 田中清玄自身、戸籍上は「きよはる」と登録されているが、呼び方を規定しないと明言している。
- (2) 『読売新聞』1972年6月8日付け、6月13日付け、7月10日付けの1972年のインドネシア石油借款をめぐる疑惑に関する一連の新聞報道では「右翼系の大物」と称された。とくに晩年から死後にかけて「右翼の大物」と称される傾向がある。なお、清玄の天皇制観は多民族国家である日本の社会的融合、政治的統合体としての天皇とまとめられる。「天皇家が健全なままに二千数百年もわたって続いていたこと自体、諸民族の統合体である日本民族を、大和民族として統一し、融和させてきたことを証明するものであり、天皇家なしには、社会的融合、政治的統合体としての今日の日本はございません」（田中・大須賀 [1993] 2008：138）。
- (3) 自民党議員である吉田茂、田中角栄を評価し、岸信介を厳しく批判した。
- (4) 例えば、永野重雄（経団連会長）、桜田武（日経連理事）、中山素平（興銀会長）、松永安左衛門（電力会社経営）ら。中山は清玄の葬儀で弔辞を述べている。
- (5) 共産党時代の活動について、警察や検察の立場から論じたものとしては福士 1931、鈴 1931、楠瀬 1932、小栗 1989、神庭・横山 1935が挙げられる。また、フィクサーとしての田中像を描いた論考が田中の死後に編まれている（大須賀 1997；1998、小林 1998a；1998b、立花 2001）。そのなかで、小栗は戦前の活動を共産主義運動と清玄の相互作用に着目して、本人や関係者のインタビュー、予審調書、論考を丹念に収集して論じた。活動経歴を時系列的に整理し、清玄の活動指針が革命の英雄に憧憬したという個人的内面的動機に突き動かされたものであり、社会体制への矛盾に苦しめられたことではないことを指摘した。現状の分析不足や自己への過剰な過信が清玄にはあり、それが1930年代の共産党と一致したがゆえに、過激な活動になったと論じる（小栗 1989）。
- (6) 堀は戦後の活動を経済活動とネットワークの点から整理する。清玄の経済活動やそこで培われたネットワークに冷戦構造に対抗する国家構想が内包されていたと指摘する（堀 2006）。
- (7) 活動を通じて知り合った高校や大学の友人たちからは、生涯の友や親族が生まれている。たとえば、戦後社会党から出馬し仙台市長となる島野武は、高校時代に学連の活動を通じて知り合い、大学ではともに新人会に所属した。清玄の初検挙は新人会幹事長を務めていた島野と一緒にだった。また、逮捕を避けながら共産党再建に取り組む際には、医学部出身でセツルメント活動に従事した滋賀秀俊を頼り、滋賀の勤務先である東京帝大伝染病研究所の寮に身を隠した。ほかにも、会員で在学中から文筆家として知られる藤沢桓夫を通して片岡鉄平



ら作家と知り合い、官憲の目を避け再建活動に従事するさいの宿の提供を受けた。のちに清玄の妻となる小宮山英子はセツルメント活動に従事した医学部出身の会員小宮山新一の妹である。

- (8) 転向を学問の遡上に載せた思想の科学研究会は、転向を次のように定義する。「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」(思想の科学研究会編 [1959] 2012: 29)。ここで指し示す権力とは人を支配する力を意味し、それは複数ある。そのなかでも最も正統的で、強力な法律的裏づけがあたえられたものである国家権力の重要性を指摘する。
- (9) 田中の回想によれば、田中家は代々会津藩の家老職を勤める家系であったという。父方の祖父田中土佐守大海は筆頭家老として幕末の京都に在勤し、会津攻防戦では指揮を執り敗れて割腹自殺した。母方の祖父田中玄直は会津戦には猪苗代城隊長として参加して五稜郭に立てこもったものの敗れ、受刑する。だが、官軍側の黒田清隆に取り立てられて北海道開拓使庁に出仕し、のちに七飯の官園の支配人となった。なお、母の愛子は玄直の養女である。
- (10) 1925年1月に、政府は中学校以上の学校に将校を配置し、軍事教育をおこなう方針を発表した。都内ではまず早稲田大学から反対運動が起こり、のちに新人会も参加する。ほかにも1922年、新人会員らが中心になって創設した社会科学の研究与実践活動をおこなう学生のネットワークである学生連合会と共同して反対活動を展開し、社会科学以外のテーマで学生たちが協働する基盤を形成した。
- (11) もちろん、東京帝大への入学は狭き門であったが、そのなかで美学科は比較的試験が容易であった。この時期に入学した会員のなかには美学科に在籍する者が少なくないが、東京帝大生にのみ門戸を開いていた新人会に入会するためには帝大に入学する必要がある、この時期、美学科が新人会入会者の主な受け入れ口となっていた。この時期の会員の美学科入学者として、函館中学同窓の亀井勝一郎(1928年入学)、長沖一(1926年入学)や秋田実(本名 林廣次。1928年入学)、丹羽道雄(1928年入学)らがいる。
- (12) 評価を別にして、清玄の記憶に残っている現役会員として武田麟太郎、藤沢恒夫、亀井勝一郎、長沖一、島野武、佐多忠隆、砂間一良、石堂清倫、新人会の先輩として大宅壮一、後藤寿夫(作家の林房雄)、佐野学、浅野晃、水野成夫らがいる。
- (13) 1927年には新人会が関わった講演会が14回記録されている。新人会主催の学術講演会として3月28日学内講演会、5月9日マルクス記念講演会、6月1日、10月6日定例講演会、11月7日労農ロシア十周年記念講演会、11月28日創立九周年講演会。学生聯合会主催で学生の権利擁護を目的とした1月31日早大事件批判演説会、2月5日反動的教育政策反対都下学生大会、4月21日・22日京大事件批判演説会。11月11日に新人会主催の学生擁護講演会。社会科学を目的とした学術講演会として10月9日・12日社会科学講演会(学生聯合会主

催)、11月30日に社会科学部独立記念講演会(新人会主催)(東大新人会五十周年記念行事発起人会編 1969)。

- (14) もちろん、会員の中にも長期にわたって労働争議に参加するものもいた。たとえば、1926年1月の共同印刷争議には中野重治が、同年4月の浜松楽器争議には大間知篤三が参加している。こうした活動は新人会員としての活動の一環であった。
- (15) 山本の演説がいかに聴衆の心を掴むものであったかを、戦後におこった共産党への熱狂的支持と比較して次のように語る。「山懸(山本懸蔵)だが、彼の演説を聞くと、大衆はワーと沸いて立ち上がったもんだ。非常に優秀な大衆組織家であり、活動家でしたな。(略)(野坂参三とは)全然違う。あんなのが大衆の前で演説をしたら、燃え上がった火が消えちゃうわ。愛される共産党くらいが関の山だ」(田中・大須賀 1993: 67)。
- (16) 由来を清玄は「山奥から出てきた田舎者が都会人にギョウという目にあわされる、そういう意味を込めている」(田中 1976b: 87)と語る。
- (17) 構成は組織部、扇動宣伝部、赤旗部、共産主義青年同盟、組合部、技術部(資金局)。技術部はこのとき新設され、以下の役割を担った。第一に党中央と組織との通信連絡、第二に指導部員の防衛とそのための住居、会合場所などの斡旋、第三に非合法印刷所の設立と非合法文書の輸送保管、第四に恒常的な定期的資金募集網の構成、第五に武器の収集・保管、第六に非合法図書館の設立。また場合によっては敵外要人の暗殺も想定していた。
- (18) 直接・間接に関与した事柄では、1929年の争議として鐘紡争議、川崎武装メーデー、ガソリントankおよびガソリンスタンドの爆破計画、電車焼き討ち計画、旧臨時議事堂焼き討ち計画。1930年6月26日の東京交通労働争議。
- (19) 鍋山と佐野はその後、反共活動をおこなう。
- (20) 清玄は割腹自殺と語るが、実際は服毒自殺だったと言われている。母愛子による清玄を思っでの自殺未遂は数回あったという(佐野 [1977] 1995)。

## 引用・参考文献

- 青森県民生労働部労政課, 1971, 『青森県労働運動史』第二巻, 青森県民生労働部労政課。
- 福士慶一郎, 1931, 「再建共産党秘話——田中清玄人を廻る赤い糸」『サラリーマン』4: 38-43, サラリーマン社。
- 後藤美緒, 2014, 『東京帝大新人会と戦後日本——知識人のライフコース的研究』筑波大学人文社会科学研究所博士論文。
- 北海道立総合経済研究所編, 1964, 『港湾労働』北海道立総合経済研究所。
- 堀幸雄, 2006, 「田中清玄」『最新右翼事典』: 402-403, 柏書房。
- 井上義和, 2008, 『日本主義と東京大学——昭和期学生思想運動の系譜』柏書房。

- 石堂清倫・堅山利忠, 1976, 『東京帝大新人会の記録』経済往来社.
- 神庭伸之介・横山清一, 1935, 『社会運動年報 昭和10年』新洋社.
- 楠瀬正澄, 1932, 『捜査戦線秘録』新光閣.
- 小林雅行, 1998a, 「黒幕の肖像 田中清玄(上)」『政界』20(11): 80-85, 政財界出版社.
- , 1998b, 「黒幕の肖像 田中清玄(上)」『政界』20(12): 92-97, 政財界出版社.
- 小山弘健, 1966, 『戦後日本共産党史』芳賀書店.
- 小山弘健・清水慎三, 1965, 『日本社会党史』芳賀書店.
- 南保夫・田中清玄・宇都宮徳馬・南喜一, 1959, 「昔はアカ, いま資本家」『文芸春秋』37(6): 142-152.
- 大須賀瑞夫, 1997, 「昭和天皇と田中清玄の密会」『宝石』25(12): 82-95, 光文社.
- , 1998, 「敗戦日本を甦らせたゴッドファーザー」『宝石』26(6): 182-191, 光文社.
- 小熊英二, 2002, 『〈民主〉と〈愛国〉——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.
- 小栗勝也, 1989, 「田中清玄と武装共産党」中村勝範編『近代日本政治の諸相——時代による展開と考察』慶応通信: 577-603.
- 大沢久明, 1962, 『物語 青森県労農運動史——亡き黎子に捧げる』大沢久明60周年出版記念後援会.
- 大須賀瑞夫, 2008, 「文庫版へのあとがき」田中清玄・大須賀瑞夫, [1993]2008, 『田中清玄自伝』筑摩書房: 371-390.
- 佐野浜子, [1977] 1995, 「産婆田中アイさんを偲ぶ」道南女性史研究会編著『道南の女たち』幻洋社: 50-64.
- 思想の科学研究会編, [1962] 2013b, 『共同研究 転向6 戦後篇下』平凡社.
- 鈴木猛, 1931, 『佐野一味を法廷に送るまで』警友社.
- 竹前栄治, 1988, 『占領と戦後改革』シリーズ昭和史9, 岩波書店.
- 竹内洋・佐藤卓己, 2006, 『日本主義的教養の時代——大学批判の古層』柏書房.
- 田中清玄, 1949, 「暴力と死について」『文芸春秋』27(9): 70-73.
- , 1950, 「武装共産党時代——追い詰められた共産党運動のたどる道」『文芸春秋』28(7): 189-198.
- , 1951, 「時局縦横談」『講演時報』676: 3-11, 聯合通信社.
- , 1976a, 「『共産主義』とのつきあい——赤色太平記1」『現代』10(1): 136-154.
- , 1976b, 「党名『奥山久太』の京浜オルグ時代——赤色太平記2」『現代』10(2): 83-101.
- , 1976c, 「共産党を徹底追及する」『週刊サンケイ』24: 47-50.

- , 1976d, 「武装共産党とコミンテルンの関係」『現代』(10) 3: 206-225.
- , 1983a, 『世界を行動する』情報センター.
- , 1983b, 『統治者の条件——日本人は何をなすべきか』情報センター.
- 田中清玄・イーデス・ハンソン, 1974「右であれ左であれ助けずにはいられない」  
『週刊文春』16 (3019): 94-98.
- , 1993「我が『転向』の深層」『諸君!』25(3): 190-204.
- 田中清玄・大井康介1976「武装共産党時代の凄春譜」『現代』10(8): 176-191.
- 田中清玄・大須賀瑞夫, [1993] 2008, 『田中清玄自伝』筑摩書房.
- 立花隆, 2001, 「私の東大論 (28)」『文芸春秋』79(3): 498-513, 文芸春秋.
- 筒井清忠, [1996] 2006, 『二・二六事件とその時代——昭和期日本の構造』筑  
摩書房.
- , [2005] 2008『西條八十』中公文庫.
- 東大新人会五十周年記念行事発起人会, 1969, 『新人会年史表』私家版.

#### 新聞

- 「田中清玄氏らも関係 インドネシア石油借款」『読売新聞』1972年 6 月 8 日付  
け.
- 「インドネシア石油借款は政治的配慮」『読売新聞』1972年 6 月13日付け.
- 「資源問題はガラス張りで 経済協力こそ最善」『読売新聞』1972年 7 月10日付  
け.